

〔新編常陸國誌五山川〕  
那珂河字如舊名粟河阿波加波

ても有るべけれども、上の文體前にいへるにかなへり、思ふに此堅川は後に出來しものにや、源ハ下野國那須郡毘沙門嶽ヨリ出ヅ、茶臼嶽ト黒嶽ノ間ヲ經テ、南ニ流レテ、黒羽陣營ノ西ヲ經テ、鳥山城ノ東ヨリ茂木村ニイタリ、本國那珂郡野田村ト、茨城郡伊勢畠村ノ間ヨリ本國ノ地ニ入ル、内ニ伊勢畠ハ古ハ那珂郡ニ屬セリ、是ヨリ東南ニ轉折シテ、兩郡ノ間數十里ヲ流レ、水戸城ノ北廓ノ外ヲ歷、南行シテ、茨城郡川俣村、鹿島郡石船山ノ邊ニ至リ、蒜間仙波ノ兩湖ト合流シ、鹿島那珂ノ間ヨリ海ニ入ル、所謂那珂湊ナリ、古ヲ以テ地理ヲ考フルニ、コノ川全ク那珂郡ノ中ヲ流ル、コレヲ以テ川ニ名ヅクル所以ナリ、中世那珂郡ヲ分テ東西二郡トスル時、コノ川ヲ以テ其界トス、文祿以來那河西ノ地悉ク茨城郡ニ屬スルヲ以テコノ川那珂茨城二郡ノ界トナレリ、風土記那珂郡條云、自郡東北臨挾粟河而置驛家、本近ニ粟河謂ニ河内家今隨ニ本名也、云々トアリ、コノ粟河ハ、即ヨノ川ヲ指セルナリ、ノ川内今尙ニ存ス粟ヲ以テ名トセルモノハ、コノ川下野ヨリ本國ニ入テヨリ、數里ノ間南ノ片岸ハ悉ク那珂郡阿波郷ニ屬スルヲ以テナリ、澤伊勢畠等ノ地コレナリ、何レノ比ヨリ全ク那珂川ト云シニヤ、タシカナラズ、神明鏡ニ應、永十五年正月十八日、野州那須山燒崩、同日硫黃空ヨリいふ所にいたるに、あやしの民の戸をやどりにして、かたりあかすに主の翁情あるものにて、馬などを心ざし侍るを、悅をなして過行によもの山紅葉しわたして、所々散敷たるなどもゑんなりと覺侍るに、古郷のゆかりは侍らねど、秋風の涙は身ひとりと覺るに、同行みなく、物かなしく過行に、大なる流のうへに、きし高くいろくのもみぢ常磐木にまじり、物ふかく大井川など思ひ出るより名を問ひ侍れば、中川といふに、都のおもかげいと、うかびてなぐさむ方もやと